

特別研究員発表要旨

新羅初期中期の浄土教

木村 宣彰

朝鮮の仏教は中国や日本のそれと比較すると特色ある展開を示している。しかし何分この分野の研究は未だ充分ではなく、多くの解決すべき問題を残している。そこでここでは新羅の初期中期の浄土教に限って多少の考察を進めてみたいと思う。

新羅の仏教は第十九訥祇王のときから民間に行なわれていたようであるが、大通二年即ち法興王十五年(538)に公認され急速に新羅社会に流布するに至った。そこで仏教公認後の約百年間は専ら中国から大乘の経論や教学の輸入にとめねばならなかった。即ち真興王二十六年(565)、陳の劉思と明観が経論千七百余巻を齎し、新羅僧玄光は入陳し慧思に師事して天台の教観を新羅に伝えた。又真平王十一年(595)に有名な円光が陳に入り金陵の莊嚴寺で僧旻の講席に列し、成夷・涅槃・般若等を学び、同二十七年に帰国し大乘の経論を講じた。同十八年(598)には曇育が隋に法を求め、また彼の慈蔵は門人十余名とともに入唐求法し大藏経一部を得て帰国している。この他にも多くの新羅僧が中国、

西域や印度までも法を求めている。この様に仏教が公認(538)されてから約一世紀間は専ら仏教の受容にとめた時期で新羅仏教の初期と為すことができる。その後、懷興・義寂・遁論・玄一らが活躍した八〇〇年頃までは研究発展の時期であり、中期に属する。更にその後九三五年に敬順王が高麗に降り新羅が滅亡するまでの時期は、その後期となすことが出来る。新羅に於いて仏教が高揚し獨創性のある新たな精神がもたらがったのは、この初期、中期即ち六、七世紀のことであった。

新羅仏教は、その受容の過程で中国の南北両系統の仏教と接触した関係もあって、初期の仏教理解は極めて幅の広い融通無礙な性格を帯びている。それは調和を重視し、宗派的対立を忌避し、より高次な立場を追求する仏教であった。それは仏教内の宗派的教學を会通するだけでなく、儒仏道の三教をも包容的に理解するものであった(大谷学報第五十三卷第三号研究員発表要旨「金剛三昧経について」)。この様な新羅仏教の性格は浄土教を考へる上に於いても非常に重要なことである。

二

われわれは浄土教といえはすぐ弥陀浄土教を念頭におくけれども、新羅では弥陀浄土教とともに弥勒浄土教が何ら抵触することなく並存している。

慶州甘山寺跡から発見された金石文「慶州甘山寺弥陀如来造像記」は新羅の浄土教の特色をよく物語っている。その銘文は三国遺事にも一部転載されているが、朝鮮金石総覧によって示すなら

ば次の如くである。

避世閑居、俸四皓之高尚、辞榮養性、同兩疎之見機、仰慕無著真宗、時時說瑜伽之論、兼愛莊周之道、日日覽逍遙之篇、以為報德慈觀、莫如十号之力

これは弥陀浄土教と弥勒のそれとが区別されずに信仰されていたことを示すものである。現に甘山寺跡からは弥陀像と弥勒像とが並んで発見されている。この造像記に無著真宗というのは弥勒から無著に教えが伝えられたという口碑に因るので弥勒信仰を指し、十号之力とは弥陀如来の名号を称念することで弥勒信仰を示している。これは開元二年即ち聖徳王十八年(719)の造像記であるが、当時の浄土教は決して弥陀専修的な浄土教ではなく、弥勒浄土教と並存した形で展開している。そればかりでなく莊周之道、逍遙之篇というように老荘との習合も認められる。これは先に述べた新羅仏教の特色と相応するものであり、浄土教も亦その例外ではない。

この様な例は新羅仏教の史料である三国遺事の中に幾つも認められる。卷三塔像篇の南白月二聖の条に、

創大伽藍、号白月山南寺、広徳二年甲辰七月十五日寺成、更塑弥勒尊、安於金堂額曰現身成道弥勒之殿、又塑弥陀像、安於講堂、液不足塗浴不周、故弥陀像亦有斑駁之痕、額曰現身成道無量寿殿

これも亦甘山寺の例と同様に弥勒像と弥陀像が同一寺院に並置され、両信仰が厳密に区別されることなく相互に混入していたことを示すものである。

更に三国遺事に次の様な事例を伝えている。即ち月明師兜率歌の条に、景德王代の花郎出身の僧月明大師の郷歌二首を載録している。郷歌とはくにうたのことで、中国の漢詩に対して名付けられたものである。仏教の伝来とともに仏教の讃歌としての役割を果し、漢讀或いは和讀に相当するものである。当時、僧侶や花郎など知識人の文学として栄えたが、現在は数首を残すのみである。一然は三国遺事の中にこの新羅語の郷歌を漢字の音と訓とをかりて記録している。その月明師の兜率歌と名付く郷歌に、

今日此矣散花唱良巴宝白手隠花良汝隠直等隠心音矣 命叱使以恶只 弥勒座主陪立羅良(今日ここに散花歌をうたうとき、選ばれていでし花よ、汝直き心のさせるままに弥勒仏の御許に待るべし、金思燁「朝鮮文学史」)

この兜率歌をうった彼が、亡くなった妹の冥福を祈って郷歌亡妹齋歌を作って「行きつく果ては弥陀浄土」と弥陀の浄土への往生をうたっている。花郎の出身で当時高名な彼が、一方では弥勒を、また一方では弥陀をという風に両信仰を共有しているのである。中国や日本では弥陀信仰が隆盛するに従って弥勒信仰が衰退してゆくのが通例である。ところが新羅ではその様な両者の対立関係は認められない。

この事は教学の面についても言える。中国では吉蔵、窺基、迦才、道綽などいづれも弥陀浄土と弥勒浄土との優劣、往生の難易などの論調を展開しているのに対して新羅の仏教界ではこのことはほとんど問題となっていない。新羅には弥陀と弥勒の浄土の優劣などを論じた文献はほとんど存在しない。ただ例外は遊心安楽

道と述文贊である。遊心安樂道は元暁の作と伝えられるが、その中に元暁歿後に翻訳された經典が引用されている等の点から元暁の著述であるか否か疑問視されている。現に元暁は無量寿経宗要などでこの問題を余り論じていない。又憬興の無量寿経述文贊も弥陀浄土易生説と兜率浄土易生説を挙げているが、この問題に対して積極的に論じようとしているようには思えない。彼はそれぞれの主張者の名は記していないが、それは迦才の説、窺基の説に相当する。憬興としては自己の問題意識よりも単に中国の教学を紹介したにすぎない。この様に新羅の浄土教は弥陀と弥勒とが習合した形で展開していた。三国遺事の法興篇、義解篇等を通して見るとき新羅浄土教を一貫する性格は以上の如きである。それは新羅仏教の一般的特色とも相応するものである。

三

ところで弥陀専修的な浄土教が全く存在しなかったと言えは決してそうではない。それは避村の民衆の中に一種の隠者的性格をもって信仰されていた。それは都市の寺院や高僧知識の浄土教とは異なるものであった。それは三国遺事の避隠篇などに例が認められる。この様な避村の民衆に仏教をひろめ、浄土教の教化にもっとも功績があったのは元暁である。元暁の浄土教や民衆の浄土信仰については紙幅の都合で割愛せざるを得ない。

シュライヘルマツヘルの宗教理解

——『宗教論』の基本的立場——

築山修道

近代神学の父と一般に見做されているシュライヘルマツヘルの宗教理解の基本的立場を考察するに当って次の二つの方向が要求されるであろう。一つは、彼の宗教理解が近代宗教思想に与えた影響が如何なるところにあったかという角度からの考察である。今一つは、逆に宗教思想史の上から見て、彼の宗教思想のもつ近代的意義が如何なる点にあるかという方向からの考察である。この両方向からの考察を通して、初めてシュライヘルマツヘルの宗教理解の基本的立場が浮き彫りにされるであろう。勿論、これら両方向は相互に他を予想し合い、切り離すことの出来ないものではあるが、以下の考察は主に第一の方向から、しかも彼の初期の宗教思想ということに限定されざるを得ないであろう。

シュライヘルマツヘルの初期の宗教的著作である『宗教論』(Über die Religion)は、その副題「宗教蔑視者中の教養ある人々に寄せる講演」が端的に表示しているように、合理的啓蒙主義の抬頭によってもたらされた当時の宗教蔑視の時代的思潮にあつて、宗教固有の領域と目的とを解明し、宗教が人間存在にとつて普遍的必然性を持つものであることを説き、以て宗教独自の立場とその本質的自由を確立せんとしたものであった。そのためにも、同書は宗教と形而上学(理論哲学)及び倫理・道德(実践哲